

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第18回 全国大会プログラム

日時：2018年11月17日（土） 9:45～18:00

場所：日本女子大学目白キャンパス 新泉山館

〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

★受付 9時30分より、2階ギャラリー

★研究発表（9:45～12:10）

	第一室（会議室1）	第二室（会議室3）
9:45 ～ 10:30	<p style="text-align: center;">司会：上智大学 舟川一彦</p> <p>1. 革命という喩法 —<i>Felix Holt, the Radical</i> における表象／代表の言語とその揺らぎ 東京大学（院）塚越幸祐</p>	<p style="text-align: center;">司会：京都府立大学 桐山恵子</p> <p>1. 仮装としての「日本」 —世紀転換期の舞台芸術における「キモノ」の利用 筑波大学（院）山口有梨沙</p>
10:35 ～ 11:20	<p style="text-align: center;">司会：日本女子大学 坂田薫子</p> <p>2. <i>Thomas Hardy, Our Exploits at West Poley</i> の雑誌掲載保留をめぐる 国士舘大学（兼）清宮協子</p>	<p style="text-align: center;">司会：関西大学 高橋美帆</p> <p>2. <i>The Pre-Raphaelite Symbols in A. C. Swinburne's 'Tristram of Lyonesse'</i> 慶應義塾大学（院）Ayvazyan Lilith</p>
11:25 ～ 12:10	<p>3. 'Beautiful Adaptations Everywhere': Charles Darwin's <i>On the Origin of Species</i> and Thomas Hardy's Poetic Adaptations 日本女子大学 Neil Addison</p>	<p>3. リー・ハントと詩のコックニー派 —ジョン・キーツ批判の背景 一橋大学（兼）江澤美月</p>

★シンポジウム（大会議室、13:30～16:10）

移民への錯綜する眼差し—排除と寛容のはざままで

司会・報告	大阪市立大学	田中孝信
報告	日本大学	閑田朋子
	東京大学	勝田俊輔
	日本大学	堀邦雄

★ラウンドテーブル（会議室3-4、13:30～16:10）

女性のプラットフォームを求めて——女性参政権獲得の歩み

司会	茨城大学	市川千恵子
報告	大東文化大学	山口みどり
	麗澤大学	佐藤繭香

★特別講演（大会議室、16:25～17:35）

プーター氏の悲哀—ヴィクトリア朝におけるロウワー・ミドル・クラスの表象

司会：日本女子大学	川端康雄
上智大学	新井潤美

★総会（大会議室、17:45～18:00）

司会：日本女子大学	佐藤和哉
-----------	------

★懇親会（18:15～20:15）

会場：桜楓会館3階

【研究発表】

(第一室)

革命という喩法—*Felix Holt, the Radical*における表象／代表の言語とその揺らぎ

東京大学(院)塚越幸祐

George Eliot (1819-1880)の *Felix Holt, the Radical* (1866)は、これまでの批評史において、エリオットの政治的保守性を示すテキストとして読まれてきた。しかし、このテキストにおける保守的態度は、あくまでもプロットから導かれる結果論であって必ずしも原因ではないようにも思える。伝記的な資料に基づきメタ的に読むのではなく、むしろそれに抵抗し、対象の根源へと遡行することが必要である。主人公フィーリクスを描かれ方には奇妙なレトリックの揺らぎがあり、それは伝記的な読解には還元することのできないものである。本発表では、レトリックの奇妙なズレに着目する。そうした精読で確認できるのは、フィーリクスの政治的な志向性を抑圧しようとする語り手の言語の揺らぎであり、それを通して『フィーリクス・ホルト』の隠蔽された政治性もまた浮かび上がってくる。今回の発表が目指すのはフィーリクスの失敗を拾い上げ再考するための、いわば「ラディカル」な再読である。

Thomas Hardy, *Our Exploits at West Poley* の雑誌掲載保留をめぐって

国士舘大学(兼)清宮協子

1883年、Thomas Hardyはアメリカの少年少女向け週刊雑誌 *Youth's Companion* の注文で *Our Exploits at West Poley* を執筆したが、この小説は結局同誌には掲載されなかった。本発表は、Hardyの少年小説が却下された理由を、同時期に *Youth's Companion* に寄稿していたMark Twainの *Tom Sawyer* (1876)との比較を通して探るものである。*Our Exploits at West Poley* は主人公の性格やエピソードが *Tom Sawyer* に類似している。しかし、Hardyの作品ではTwainに見られる社会批判はかげをひそめ、かわりに〈向こう見ずな冒険心は抑制して自分に与えられた職業を全うすべし〉というmoralが付け加えられている。ここに雑誌側の期待にそぐわない点があったのではないか。社会的・文化的背景も視野にいれつつ、HardyとTwainの少年小説観の違いを論じる。

'Beautiful Adaptations Everywhere': Charles Darwin's *On the Origin of Species* and Thomas Hardy's Poetic Adaptations

日本女子大学 Neil Addison

Thomas Hardy was a great admirer of Charles Darwin's work and, according to his autobiographical *The Life*, was 'among the earliest acclaimers of *The Origin of Species*' (198). *The Origin* is balanced in its representations of nature, the cruel 'struggle for life' mitigated, as Darwin wrote, by 'beautiful adaptations everywhere, and in every part of the organic world' (115). For Darwin, nature arbitrarily produced beauty while engaged in ceaseless natural competition. Examples of such random vitality can also be found in many of Hardy's poems such as 'I Watched a Blackbird' where the beauty of the creature's 'crocus-coloured bill' juxtaposes its transient 'building scheme' (827). Further, while Hardy's world is representative of Darwinian competition, it is also indicative of the ways in which certain creatures are shown to thrive in Darwin's system. Hardy's rural subjects, for example, such as an old horse, a ploughman and a pair of lovers in 'In Time of "The Breaking of Nations"', often exemplify survival and endurance, so that 'war's annals will cloud into night / Ere their story die' (511). Hardy's poetic adaptation of evolutionary theory can therefore be viewed in a balanced, pessimistic and optimistic light which also reflects the nature of Darwin's writings.

(第二室)

仮装としての「日本」—世紀転換期の舞台芸術における「キモノ」の利用

筑波大学(院)山口有梨沙

日本趣味がピークを迎えた世紀転換期のイギリスでは、輸入した着物に加え、西洋人向けに製作された「キモノ」が上・中流階級の女性の間にも広く流行し、ティーガウンなどとして受容されていた。一方で「キモノ」は *The Mikado* 等の舞台や仮装パーティの衣装としても着用された。「*Geisha*」に扮する男性の姿も当時のポストカードの中に多数見られる。先行研究では、ファッションに影響を与えた「キモノ」の研究は散見されるが、衣装としての「キモノ」に焦点をあてた研究はほとんどなく、また両者は別個のものとして捉えられてきた。だが、両者とも、イギリス人が「他者」の衣服を借用あるいは修正し、自らの身体に仮装を促した、文化接触ないしは文化翻訳の媒体である点で共通している。本発表は、この点

を、現存する「キモノ」の調査と舞台写真や記事、ポストカード等の分析を通して明らかにするとともに、「キモノ」が世紀転換期の身体文化やジェンダーに与えた影響を詳らかにする。

The Pre-Raphaelite Symbols in A. C. Swinburne's 'Tristram of Lyonesse'

慶應義塾大学 (院) Ayvazyan Lilith

Algernon Charles Swinburne (1837-1909), a Pre-Raphaelite poet, showed great interest in the Arthurian cycle. In his poems, he touched upon several of the topics discussed in Sir Thomas Malory's *Le Morte d'Arthur* (1485). It would not be an overstatement to say that the chef-d'oeuvre of his life was the poem 'Tristram of Lyonesse', (1882). Written after both Tennyson and Arnold, Swinburne's 'Tristram of Lyonesse', not surprisingly, has a contradicting position towards both of these poems.

What makes the epic piece stand out in the parade of countless poems on Arthurian topics, is not only Swinburne's wide range of knowledge in matters mediaeval, but the unique and distinct Pre-Raphaelite symbolism manifested through author's marvellous poetic language. Themes and naturalistic visions of the author are orchestrated through the means of parallelism and contrast. The majority of Swinburne's comparisons and parallels are drawn with jewels, colours and flowers, such as 'bloody-bright ruby', 'amber-coloured sphere' or 'rose-red sign'. My study centres on identifying such symbols in the Pre-Raphaelite paintings (Dante Gabriel Rossetti, William Morris, Edward Burne-Jones, etc.), which inspired the poet.

The primary sources for this study include Swinburne's poem itself, the paintings of the aforementioned authors, as well as the correspondence of Swinburne with his fellow poets and Pre-Raphaelites. My analysis is aimed at gaining a deeper understanding of the remarkable Pre-Raphaelite symbolism, as well as the insights and prospects which Swinburne sought to convey through his 'Tristram of Lyonesse'.

リー・ハントと詩のcockney派—ジョン・キーツ批判の背景

一橋大学 (兼) 江澤美月

詩人ジョン・キーツ(1795-1821)は、1816年、当時雑誌『エグザミナー』の編集者として知られていたリー・ハント(1784-1859)によって文壇に紹介され、紹介者ハントと共に、当時政権与党であったトーリー党を支持していた雑誌『ブラックウッズ・マガジン』の編集者、ジョン・ギブソン・ロックハート(1794-1854)によって激しく批判された。これが詩のcockney派批判である。この批判によりキーツの評価は低迷を辿ったが、彼の死後27年を経た1848年に伝記が出版され、以降詩人としての彼の名声は不動のものとなった。本発表では、キーツの再評価を行った『ジョン・キーツの伝記、書簡と遺稿』が、トーリー党の流れを汲む保守党のリチャード・モンクトン・ミルズ(1809-85)によって上梓されていることに注目し、ハントが1820年に行ったキーツの晩年の詩の解釈が、当時、トーリー党にとってどのような意味を持っていたのかを遡及的に考察する。

【シンポジウム】

移民への錯綜する眼差し—排除と寛容のはざままで

ユグノーと英国織物産業	司会	大阪市立大学	田中孝信
—デザインにおけるイングリッシュネスの模索	報告	日本大学	閑田朋子
アイルランド移民—複眼的・長期的視点から		東京大学	勝田俊輔
イーストエンドとイーストサイド—ユダヤ移民の世界		日本大学	堀邦維
チャイナタウンを物語る—「オリエンタルなロンドン」の誘惑			田中孝信

2016年に実施されたEU残留を巡る国民投票の結果が僅差で離脱であったことはまだ記憶に新しい。その際の重要な争点の一つが移民の流入であった。歴史を振り返ってみても、この反移民という感情は繰り返されてきた。そもそもイギリスは、自らを民族的に多数派と考えている人々も大陸からやって来た人々に起源を持つ移民の国。その多数派が新たな移民を「他者」として人種主義と外国人嫌悪をもって排斥してきたのである。ヴィクトリア朝もそうだ。大飢饉によるアイルランド人やポグロムによる東欧ユダヤ人の大規模な流入、さらには大英帝国の版図の拡大による有色人種の到来には、彼らの貧困はもろろその異質性ゆえに、敵意と偏見が向けられた。だが同時に、カトリック解放法やユダヤ人解放法のように「よそ者」を取り込もうとする動きが見られたのも事実である。そうした排除と寛容はどのように機

能し、移民はイギリス社会に対してどうした反応を示したのだろうか。両者は互いに影響し合ったのか、アイデンティティやイングリッシュネスに変化をもたらしたのか。

今回のシンポジウムでは、こういった疑問を端緒に、ヴィクトリア朝初期から 1905 年の外国人法を経た第一次世界大戦に至る時期を視野に、ユグノー教徒、アイルランド人、ユダヤ人、中国人といった 4 つの移民を取り上げ、社会と移民たちとの関係を探ろうと試みる。それは、第二次世界大戦後の非ヨーロッパ系を中心とした大量移民のイギリス社会におけるプレゼンス、さらには現代日本における「労働力」としての移民／外国人について考える手がかりを与えてくれるだろう。

【ラウンドテーブル】

女性のプラットフォームを求めて—女性参政権獲得の歩み

司会	茨城大学	市川千恵子
報告	大東文化大学	山口みどり
	麗澤大学	佐藤 繭香

2018 年 2 月 6 日、イギリスにおいて 30 歳以上の女性に参政権が与えられてから 100 周年を迎えた。財産条項と年齢の制約が付され、男女平等とは程遠いが、1832 年に最初の女性参政権嘆願書が議会下院に提出されて以来、長きに渡る闘いの結晶であることは言うまでもない。本ラウンドテーブルでは、ヴィクトリア朝における女性参政権運動の展開を概観し、「1918 年国民代表法」(the Representation of the People Act 1918) の成立によって参政権獲得実現に至る女性たちの階級を超えたネットワーク形成と多彩な活動、ならびにその成果を再考したい。まず、19 世紀後半の高等教育とチャリティを通して、ミドルクラスの女性が参政権問題に関心を寄せるようになる様相を提示し(山口)、Mary Lowndes (スタンドグラス作家、芸術家参政権同盟会長、NUWSS メンバー) を中心とした女性芸術家や女優参政権同盟 (AFL) に参加した女優たちなどの職を持った女性たちの参政権運動への関心と関与について検証する(佐藤)。そのうえで、参加者と「女性のプラットフォーム」について意見交換を行いたい。

【特別講演】

プーター氏の悲哀—ヴィクトリア朝におけるロウワー・ミドル・クラスの表象

司会：日本女子大学	川端 康雄
上智大学	新井 潤美

チャールズ・プーターとはジョージ・グロウスマスとウィードン・グロウスマスによるユーモア小説 *The Diary of a Nobody* (1892) の主人公である。ロンドンの郊外在住の事務員で、'Home, Sweet Home' が「モットー」で、Pooterish という形容詞まで生み出したプーター氏は、いわば「愛すべきロウワー・ミドル・クラス」であり、その「日記」は今も人気絶えることがない。しかしヴィクトリア朝におけるロウワー・ミドル・クラスの描かれ方はこのようなものばかりではなかった。19 世紀後半においてロウワー・ミドル・クラスは揶揄や諷刺、批判の対象として、あるいはリスpekタビリティの裏に凶暴性を隠し持った、脅威的存在として描かれることが多い。19 世紀後半にその数と共に存在感が急激に大きくなったロウワー・ミドル・クラスについて、小説やエッセー、文芸雑誌の記事や挿絵などを材料に、その表象を見ていきたい。

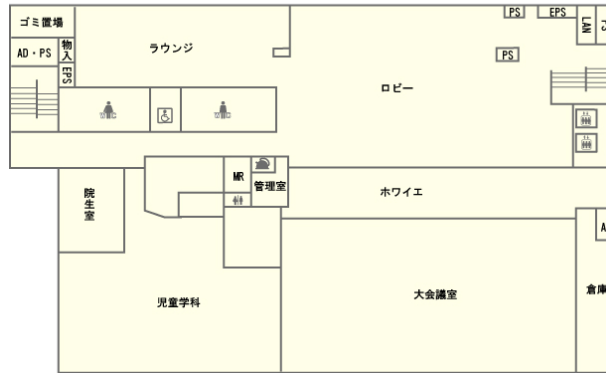
*会員以外の方の参加も歓迎いたします(無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費、一般 5,000 円、学生 2,000 円をお支払い願います)。

★ 休憩室：会議室 2

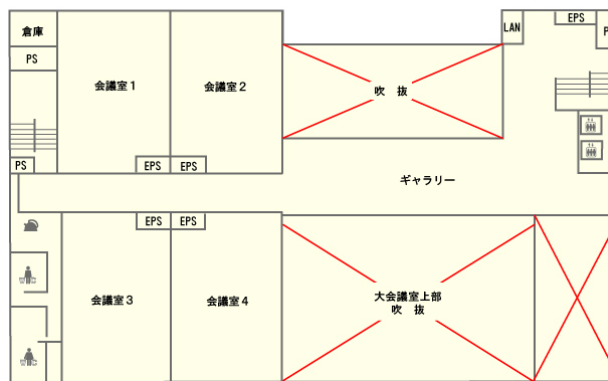
★ 書店展示：1 階ロビー

会場マップ

新泉山館 1F



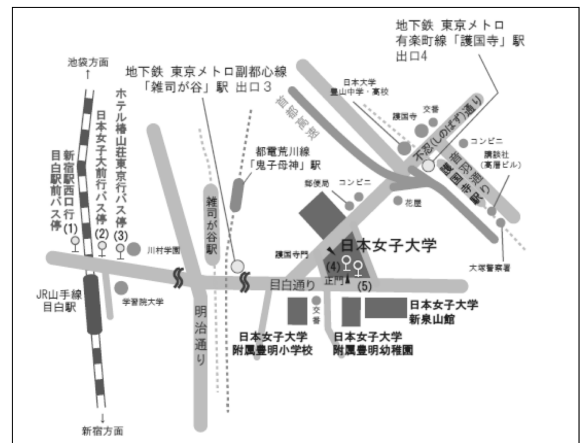
新泉山館 2F



会場アクセスマップ

最寄り駅から

- JR 山手線「目白」駅
徒歩:約 15 分
【都営バス(学 05)】日本女子大学前行
【都営バス(白 61)】新宿駅西口行、またはホテル椿山荘東京行
- 東京メトロ副都心線
「雑司が谷」駅(3 番出口) 徒歩:約 8 分
- 東京メトロ有楽町線
「護国寺」駅(4 番出口) 徒歩:約 10 分



日本女子大学図書館が所蔵するケルムスコット・プレス版『チャーサー作品集』(1896 年刊)は、ウィリアム・モリスが設立したケルムスコット・プレスで印刷されたジェフリー・チャーサーの 1 巻本著作集で、ケルムスコット刊本のなかで最高傑作とされる逸品です。図書館の展示コーナーにて、ウィリアム・モリス関連の図書とともに、本大会に併せて展示いたします。ご興味のあるかたは、是非ご覧下さい。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
(The Victorian Studies Society of Japan)
事務局: 東京都文京区目白台 2-8-1
日本女子大学文学部英文学科
佐藤和哉研究室内
Tel: 03-5981-3560/Fax: 03-5981-3549
E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com